

●南大東村訪問（沖縄県南大東村） 浅沼 隆章

9月21日（日）～9月25日（木）

沖縄県那覇空港からさらにプロペラ機で約1時間、南大東島は八丈島の玉置半右衛門が約125年前に開拓した島です。この縁で約40年前から八丈島との交流が始まり、町長や議員、太鼓六人会、役場職員とともに7名で訪問、中学生同士の交流も続いています。今年も「豊年まつり」の時期に合わせ訪問し、宵祭・本祭りに参加し、地域の皆さんと交流を深めました。

南大東島の歴史

- 開拓以前

南大東島は長い間、無人島でした。隆起サンゴ礁でできた平坦な島で、山も川もなく、周囲は断崖絶壁に囲まれています。

- 開拓の始まり（明治33年・1900年）

1900年（明治33年）1月23日に60日余の難航海を経て現在の西港に上陸、八丈島出身の玉置半右衛門が23名の開拓者とともに島を開拓しました。彼はサトウキビ栽培を目的に八丈島から移住者を連れてきたことが、南大東島の開拓の始まりです。

- 八丈島とのつながり

入植者の多くが八丈島出身だったため、言葉や食文化、相撲などの文化が持ち込まれました。現在でも八丈島文化の影響が色濃く残っています。

南大東島の産業

- 主産業：サトウキビ栽培・かぼちゃ栽培

島のほとんどが平らな土地で、現在も一面にサトウキビ畑が広がっています。

気候は雨が少なく乾燥していますが、台風の通過による雨がサトウキビにとって恵みとなることもあります。最先端技術を活用した大規模なスマート農業の整備も進んでおり、農家の生産意欲を高め、所得向上につなげていました。サトウキビは島の基幹産業で、製糖工場が島経済を支えています。また輪作作物としてかぼちゃが広く栽培されており、ブランド化を目指しています。欠航などにより野菜が入ってこない時期があり、安定供給するため、葉野菜をハウスで水耕栽培をして学校給食に提供しています。今年7月の豪雨災害の影響で多大なる被害を出したものの、村民の努力により主要道路の復旧は完了していました。

- 水資源の確保

山や川がないため、生活用水や飲料水は海水淡水化装置で作られています。この装置は下水の浄化にも活用されています。

- **漁業と食文化**

周囲を深い海に囲まれているため、カジキやサワラ、マグロなどが水揚げされます。これらを使った「大東寿司」は島の名物料理です。

- **観光と文化行事**

江戸相撲をはじめ、八丈島と沖縄の文化が融合した独特の伝統文化が残っています。「豊年まつり」は島最大の行事で、2日間地域全体が一体となって盛り上がります。

私たちも八丈島の“はっぴ”を着て山車を引き、六人会が太鼓を披露し大いに盛り上がりました。

まとめ

南大東島は、八丈島の移住者による開拓から始まり、サトウキビ産業を中心に発展してきました。自然条件の厳しい島ですが、住民の努力と文化の融合により独自の産業と伝統が根づいています。地域や青年団活動が活発に行われているものの、高校がないため、島外に進学をしていますが、「豊年まつり」には学校を休んで手伝いに帰ってくるほど、郷土愛があり、自分の島や地域を大事にしている風景をたくさん目にすることができました。郷土愛を育む教育の見本となる大変良い事例であると思います。

人口減少などの影響で文化継承などの問題も出てきていると聞きましたが、大変強い郷土愛でより良い方向に文化継承が進むことを願っています。また、大東島で学んだ事を八丈町の地域・産業・文化の施策に活かしていきたいと思います。